櫻姫全傳曙草紙　四末

へ13
185
5

於
184
分

かつのの父ら〳〵こまぐ〳〵と教化しけるに兄弟の娘幼心ふかも大ふ得道し〳〵
隨喜の涙をながし剃髪受戒を願ふれば常照阿闍梨はるのめるゝに
ちびろう切松出世の骨ゝ拾集ゝ食飯の器ゝ入り〳〵袋ふおさめ頸ふ
かけいざ伴ひ知られといふふぞ阿闍梨両人が手ゝらゝへて山ゝ下り大谷
の菴室ふいらうけるに上人ゆゝ〳〵両人を剃髪せしめ法衣ゝ与へゝ懺悔
玉ひぬるろふ上人歸依の大旦那月輪の禪閤此支なきにめしていゝ
良ふ月輪の人の幼女ふ扶持を与へゝ養玉ひめ建暦二年正月二十五日
上人遷化のさへまぐも此幼女ゝる病床ゝるるとぞ看病りるぞ
○此両尼成長ふまぐ〳〵ひ容貌美麗ゝ〳〵玉のごゝくゝるゝ勢ゝ
勢至の化身〳〵人〳〵いひひらう六時礼讃ゝ〳〵上人の徒弟安
樂とらひる僧經文ゝめつめゝくほゝらゝふ太秦の善觀房ふ

もてなせ共定て色明ふるせる共徒然草かの両尼色〻くさ〻へ鉦打ち〻〻く
洛中洛外を勸化しけるぶ哀歎悲喜の音曲めづらしくたふとうりのまに
聽衆耳目をおどろかし結縁をるりのおもくその色の妙なる共感に松虫鈴虫と
しるもうべなるかな其名たかくさかえることを業ふ今音のかそへ鉦を松虫と
○難波名所記共案ふ今宮の辺ふ松虫塚とふのり鈴虫の行方へいと
のうりん松虫此所ふ来りて〻〻又案ふ松虫鈴虫ハ後鳥羽院の宮女と云説のり
松虫塚とふ云〻又案ふ松虫鈴虫ハ後鳥羽院の宮女と云説のり
いづれか是なるん 後伏見帝の勅ふよりて正安の比修し給ふ上人行状繪詞ふ
松虫鈴虫の事とのせどもふ其傳と詳ふ知る者まれなり
○又かの両尼共二人比丘尼といひ〻れ〻し案ふ寛永年間石平道
人の著せる二人比丘尼と云草紙ふ〻れ〻ふ〻〻〻作りかへりの欲
○又両尼毋の骨共〻びふいかり〻〻勸化しけるゆゑふ髑髏の尼ともいひる

〻〻〻れハ重衡の北の方ふ比して時の人の称ドる異名なるべし

第十五　櫻姫悲薄命二　卧病

爰ふ又探ひめハ山吹〻〻りふ館をのがれ出亀山の辺まぎれ行
毋野分の方の方のうへ共氣づひ行方共尋〻〻ふゆゑめこいひ〻
〻〻〻

かとまうつひふ両人を生捕高手小手ふくつ〳〵茂林の裏ふり
返さり掘ひめい頬ふ落涙〳〵薄命を悲み山吹ハ歯とやく牙とあら
く後悔とれども更ふかひ迄追人の者どもハ両人を中ふを乗車座れ
居ゐ〳〵ひ〳〵擢休息〳〵けるぶ一人いひけるハ我さきふえつけされば賞金を
ゐ〳〵ひ我そのゐっぶ以けるら取べ〳〵とつふ一人ゲいふ汝さきふえつけ
るの〳〵ゐ〳〵かの女ふ斬立られいちめ出〳〵逃さるふの〳〵ざや我
とそかの女ふ捕へ〳〵第一の功ゐれといふ又一人ゲ畢竟搦ひめ以捕へ
られ者こそ大功ゐ日賞金以おれ〳〵るべきふ我ゐりといひ〳〵そそ
ゐ日ゲ残る者等口をひとさし此ふ居者ゐゲ日ら此点ふ労せざる
賞金の配分ハ平等ふとべ〳〵るどいひ〳〵互ふ争ひさて〳〵ハ同士打
〳〵〳〵大ふ騒動〳〵けるこそ卑怯ひる折〳〵も背後の大樹の蔭

ゐり一箇の美男子明晃〳〵る刀以打ふり〳〵とさり出追人等ら
散〳〵ふ斬立られば其猛勢ふおそれ秋の木の薫の散て〳〵東西ふ
逃去るかの美男子ゲ〳〵両人のいまゐめ以さるそ地ふ伏く
恭ひけるハ姫君ハ小子以ハ過ぎ小子ハ御家士篠村八郎
公連ゲ一子二郎公光と者ゐ〳〵十七年以前殿の御勘氣以
ゐり〳〵ふ浪〳〵の身とゐり〳〵るいられハ一席ふ尺〳〵ざけ日ぶゐり〳〵
語ゐやとべ〳〵小子御館ふいられ〳〵れ〳〵〳〵苦辛仕日仔細以ざと
ゐ〳〵〳〵御勘氣の御赦免をねゲ〳〵ゐんと存ド立出る途中ふて相公
信田平太夫ゲ刺客の乃ふ打日ぶ御家滅亡のは以ゲ謄課を先
ひ〳〵立ゐ〳〵る此林の裏のさハゲさをゐゲ〳〵ものかゲ〳〵窺〳〵
かの者〳〵も姫の御名以ハせ〳〵ゐる御顔ハうんゐり侍〳〵ざい

れと悟りかどうさくをひきすりぬとのべけるに様ひめさくら
ゆめおもひ公光めくるかる危急の折汝ふめひい誠ふ神仏のたすけ
あうといとく悲びぬ山吹公光がそばちうくまりおん身妾ふ又忘れ
ぬあう妾ハ初うりける時おん身といひなづけめひ佐伯平弥二ゞ娘山吹
めくゆくのふ公光都をつまくと打まりいうふもまうり昔と色く
かくうもかうこれば又めやまりぬとく互ふまでー物語ー山吹
野分の方の行方をれざるる公かくうくく愁ひけるに公光まうくへ
八且姫の御身ふ中とむべき計を思ひ母君の御ゆくへを易信田平大夫
公打くく亡君ふ手向御家ふ再奥をべー此度大望をるべ急れ度
をとびくに小子今山州小野の里ふ住ゞ身貧ーく姫を安んぞべき
便迫これのことをめうひ乃れ難義をるといひく愁ひける時ーも一羽ふ

曙巻之四

悠ふ飛来りくく公光ゞ懐ふいりめ公光ゞこれを捕へ汝野鷹ふかうれしう窮
鳥懐ふいるこれへ狩人もこれをとくぞとのつう我くもお臣ゞひの窮鳥をり
くくふ飛去とく放ちやりけるふ又飛ゝうくく懐ふへるやくくをる度三度ふ
およびけるべいぶうくくくくこれば頭金色ふ惣身猫斑の色ーく
尋常の鳥ふめくゞ公光いくく山ゟ三度まくく我懐ふいりゐること不思
議ふれちうこう大内ふ鳥合ふ好せゐふいりふ公御殿上人きくくく
これを愛玉ひ鳥の價くうくこれ支古ふ例迫此鳥ふ代をるべまくこの
宝を得べーこれまくく我氏神篠村八幡の授ふ乃のるくめとと
大ふ喜び鳥ふ懐ふ山吹りくも姫を守護ーくおのゞ住家
ゞ飯ゞめ案ふ承元のころ後鳥羽院鳩ふ好く五ゞ支東鑑ふ鳩合の支明月記ふ見ゆくく公光家ふかつて
鳩ふ賣りるふ果くくのまくこの金を得く大ふ喜ひ少も私用ふつう

この條村二郎
山吹かと
さとりふ
との野の里
小野の里
の荒屋ふ
櫻姫を
養ふ

きべく姫の支わのくもちかぬ仕家ハ公光ちりぐろ移り住めるく人の
住めしくる空屋なれば軒端かくふる壁くずれ今もたゆる人とろふ
ぐろの旧家わく窓ハ蘿蔔くひまくひ庭ハ葎生茂て板ドさも
朽簀子も破れく床の下より草生いぐめゆくいぶせ住居なれば
姫もなくハめくちふぬおそろくくなぶそくおびさんとおりへどくく父人
里ふきくかくれ家ハ寃竟の地なれば他所ふうつりく信田方ふりれ
きこ名んわまくなくめとそひかの金ふもめとび家を造りかつくくも
安けきどそれも人目立ぬいくひ一間の壁ぬ払ひ屏風をなくかこひ
ものくく姫の身のやとりの調度ハさくくなるぬめらめべくとひそふのあ
来て暈絢縁の畳二畳ふ唐綾の褥をもて几帳衣架几火桶燈臺
のたぐひ皆新くぬ用力朝夕まねくもろ飯器のたぐくも螺鈿なれ

餅ある物りちわけきばかくる荒屋ハ似もつるぬ香炉ふ香氣たえぐんべ
かかり一室ふくち天津乙女の賤が伏屋ふ天降くくると疑風情のつく
のぐく一心の誠を尽くし公光ハ日毎ふ出さく野分の方の行方ぬ尋山吹ハ
ちくぬくなれどくく仕へなれば掃ひめ其志ぬ感ぐく袖ぬちわくの日も
なかくくにくるぐ父をもて家立くくへふ母のゆくハもれど宗雄ハ
ちくく別て憂支の數ぬくくれハ片時も公ぬ慰る支なく昼ハ終日ふ
ちひくく夜ハ八色の鳥と鳴明く仕へと為べき我身ちくんと歎きくくを
哀なれ公光ハ姫の愁ちさもとくくふものひど播磨ふ送て去く宗雄
のめくふめハせやさバくくハうさぬも忘て玉のんと山吹とかくくのひく
その公支度くくくうち探ひめ公地例なくくど悩く煩ひれば両人ハ
大ふ驚き枕方後方ふちひ良薬を用力仏神ふ祈て公を尽くく

看病けるが漸くふようろう日くふつうれくたのことけあくなりゆさ
ひふ終焉期とうえけまバ山吹姫の額を撫わふせわろく夏のくお
のくゐへしとあくくいへど拠ひめ付度ハとても快氣めるほとかゆくく寛
悟ーつまびいひのことべさ支ちるおさつる文めりあうん後ふえよ舘外
逃出さる時も肌ばくゐさめ觀音の小像ハ母人へ香の色ハ宗雄殿へおろ
てよ護刀ハ公光へひと庫子の小袖ハちふ手ふべーのちのかとこもろよ
ー妾ゞ此黒髪ハ曉ふ夜ふ養くく宝ともろこと玉の如ーあうくんのこも
髪外わろさと彩衣とさせくく粧を失ふ夏ゐれうれくく涙ちゞ乞尽
ーの数くハ草葉のかげみて賞とべーといとろう苦兄息の下ふ念佛
ーもや脣のうごくのくわうう絶ふ十七歳を一期とくくく南柯の
夢と醒てめ嗚呼哀哉嗚呼痛哉此日ハこれいろまの日ゞや承元

二年八月某の日ゆり山吹ハ水のくく姫の脣をもあーつむせうろく
歎さけるゞやめりくしけるハ山姫外手馴をもしより後一日庄時とゐる
ものまろをれ夏ハ我身の年のつゆる夏ハろろとくく生長ふへりと
ハ蓋ろひくく育まりくせ月日のごくふ作ざつるふ只今やくと目とくる
夏の公憂さまうて寢のねざめも山吹くと呼ゐひくく御邑の耳れ
底ふ止り只今の御姿ゆふかげろへバ更ふ忘るべーとも覚ゞ兄ろう命
生くくべくく千年万年を絶べきや死出の山三途川をバ誰ゐハ渡くゐる
べ兄恐くくろ石まんふ附くくまりあ妾外こと易玉りめ生くくふも苦ー
さふ姫の御供仕くんといひも果ゞ氷ゐと刀外拔くゐちくく咲ふりた
たくんとろう外公光かーらめ汝歎のめりふ狂氣くつるう野分の方
の御ゆくへ外尋信田平太夫外打く御家を再興とるまゞくハ汝も

我も大切の命なり今死しく行のかひやのれとさめぐ理ぬ尽られば
山吹やうく死とてまり公光ものも野辺送りの支度しりせめてへ
御遺言いでくこそふぞしとく山吹うひじく姫の屍を抱のげて
湯ぬひうせいけり時のぐく裳ぬうのめ櫛并ぬさうかば面ふ紅粉
ところどり白綾の下ぐさ纐纈の緋の上著唐織の袿衣を著せられ
ハ生る時ふも変くど美麗なり扨棺をめくあく屍をとさめ藤六さて
年表る譜代の家僕忠義の者ふくまし家を捨ぬ来らく住へ
居る公相人ふ公光こぐく棺をかげ世ぬくかる茅ものれハ日のくる公
まちくめくりを寺ふ送行引導の語ぬ授けくれり島部野の
茶毘所ふかる行く藤六をくへしめ狼犬の遺躰と損ど盗賊の遺
財を窺を忍れ公光こぐく棺とまりり權下火の時をまちまれふ

曙巻之四

くくくくく藤六めくこじく馳来り告くいくく信田の家人等
姫君と奪くくんと乱入く姫をおしとヤ世ちくんと凝く山吹様ぬくり
紀明もくくく引立去ぬ僕らめんと争けどくも敵くがくて引退
くゆく追行くくくひゑへと息もつきめへどひられハ公光驚きた
ぬひうみぐり支よ汝下火の時まく此棺をまりり居くとひかくく
ぬがくく ふ馳去ぬ

第十六

櫻姫甦生清 枉死

抑島部野とふいひぬ跡ハ形もひくく古つの人と稀ぬれと
よしふたりつど無常遷流くく送ざる日もなけど末の露のう
雫かれさんぐり煙常ふ絶ど數くくの下の石もおかくハ苔ふ埋もて
機ふ人めりともえめり幽魂夜月ふ花愚魄秋風ふ嘯と賦く

とゝもかる刷とやいひくんとゝめくるのハ死人の骸草深して露滋
くさのめくいぶせ気荒野ハいと哀なる所なり藤六ハ棺ハ守りて
居るうぶとゝ下火の時いとうとゝせの半鐘をうしけるとゝ墓守の僧
ハ棺ハ渡し主人の身の上ハ氣づかいとゝぶいとゝ弛ぬ此墓守の
僧ハ別人ハのゝす是乃清水の清玄がなれる果と清玄清水ハ退去
しゝ所ゝ方くハ迷ひのうち死けるぶ漸本心ハ立うち此野の墓守とゝう
ゝ荒るる菴ハ住日毎ハ送ゝ来る亡者の下火の時ゝれば經ハよゝみ
十念ハ授ゝ回向をる夏ゝ此時櫻姫の棺ゝもゝゝぞ
受取ゝ已ハ煙とゝもゝ例のごゝゝ經よゝゝ回向ゝ十念ハゝぶけ
ゝふいぶくとゝのくかとゝふ十念ハゝる色を清玄めゝゝ迷ハ入も
ゝ化ハ行人ハ答るゝ草むふかとぶく虫の音うゝ鳴ハ阿弥陀仏
とゝゝれば阿弥陀仏とゝふる色平ゝハの棺の裏ゝう清玄益の中ゝみ
立ゝうゝ棺の蓋をひゝ死おかるゝゝ月の光ハよゝくゝれぐいハ
日来墓ゝう姫ハ疑ひ病ハ月日をかさめゝハや肉脱疲痩の体ゝぶゝ顔
色変せゝど唇ハ紅ハゝく玉顔ハゝぶゝくゝれば人ゝぶゝ
夢うゝゝもいゝ死ゝど且驚且悲動情ハのびて棺より出ゝ骸ハ抱さ
くいひゝれハ我ハ夫のハさきさらハ山姫のを辛くハ成果人とハ思ハ愛情の
念深く年来の修行をむなくせゝゝを悲ゝゝれゝゝハ化相の詩ハ男女
の嬉楽ハ互ハ臭骸を抱とゝひゝゝとゝべゝう人ハ皮ハのゝ愛ゝく唯いつ
ゝの姿ゝう支をゝゝゝどいづゝの人ゝゝれハめゝゝゝん茶毘所とハゝゝゝハ
我住此野ハ送ゝ眼前新死相ハ又せゝ我執著の悪念ハ断ゝむゝ意
ゝゝく涙ゝ因縁ゝう いとく化情をゝゝゝ正覚ハ帰ゝゝゝれどハゝ

櫻姫死して鳥部野の茶毘所わ送らる清玄零落

墓守とありとうとと姫の屍と

花の姿なむなり〳〵灰となさんこと惜へく悲むべしとひとり嘆ひとり説所
のこ〳〵落る涙姫の顔ふ〳〵〳〵とかう〳〵口ふいう名が忽一息ふ出し
けるこいそぎまぐひ〳〵菴室のうちふ抱入身うちふ按ノ薬ふ口ふ入て水
ふそそぎ身ふちうづけ〳〵肌をのこめなぐさもれふんぐ〳〵めらく甦生こと
得〳〵う清玄一向夢のこちし姫こちはいうふくこちへば桜ひめ目ふ泣〳〵ふ
のうれ勇光なるこ〳〵悶然とまもひ香煙ふふとぢう〳〵れ御仏ふ
ひうひこふ〳〵ふ冥途ふ〳〵ゆ女はいつの伝某こうやはしく涼さ眾のうりの
う〳〵悲ふなれむれう〳〵とのひく〳〵さめぐと哭さめ春の花の雨ふ悩こ
秋の草の露ふ霑る風情なるふ清玄つまく〳〵打まもう居けれが俄ふ
一陳の冷風さと吹清玄が身うちふ冷とわるとひく〳〵忽心中恍惚〳〵て
再愛著の念ふ生ゞ姫の年ふこ〳〵へ〳〵ひうれはめづしや桜ひめおん身ハ

我をえ知るまゞ我ハ清水寺ふ住〳〵清玄とふ者なるひめうどや清水ふ
まうで折我偶〳〵ゆめ〳〵おりひのめまう病ふ臥且夕の露命危うし〳〵ふ
や〳〵命たこうう〳〵彼所ふ迷ひ出めてもなく〳〵ひめの在所ふ尋〳〵月日
ふ〳〵〳〵丹波國桑田の長者鷲尾の息女ゆく桜ひめとふ〳〵のれ
人のかくるふ泣〳〵うもこ〳〵さふこ〳〵へどたくらふ丹波ふ赴く尋るふ鷲尾
の家亡姫のゆく〳〵もれぞと安くわとんと力おちとそも我ふ〳〵げこれ
約束なるめとのこうめ〳〵前の月此菴室ふ移り墓守の賤身とまううぶ
こう〳〵病がうゆく〳〵かく姿もおとろへぬ此所ハ則多部野の茶毘所なり
ゆ人身死〳〵ひめ〳〵肝ふ迷〳〵れ我分抱ふめひく甦生これ支宿縁の仏
こふの〳〵ぞや此両年哀迷ひ〳〵身ハ蟬のめけゞの如まう命ハ草ふ
の露のやうふ消なんとと哀ゆ人の死なめのうハ情かけてよ桜ひめこん

櫻姫甦生を
清玄再
凡情を起く
姫を悩まを
弥陀二郎
姫を
そふ

秋香信女
敢月童子

五三桐

曙巻之四

とゝさせむとて手を合せ拜むに彼女の形
ふかへれ袖のくゝりかゝる彼がありさまにて
いとゝ頭は栗の毛毬のごとく身の垢もつりゝ
うして腹大ふ膨のりたる水松のゆふかぶれ恰餓鬼道の衆生の
ごゝ殊更此菴は墓原の草深さうちふたらさはめくいぶせくもしるれば
物毎ふのゆゝしきとつゝ変色折しも茶毘の煙たゝとゝちのぶり臭氣
鼻を切るゝ無常ふ感めを空ふのがれ香煙は悪鬼の息ふ吐ゝと
いぶり風ふるびゝ尾花は亡者の人ふ招くとあゆゝ只こはさかそろしさふ
ゝへど打ゝるゝ又も死ぬべきゝちすゝ清玄あは姫ふ取ぶらく
かさぶけば横ひの色ふるひ其志へられゝ旦で妻ゆは夫もあれば
ゝとぶゝと殊ふ情身情ふのかゝちとまるびなぶゝさる織へゝ忘ふ

ゝちゝ涙めさゝ色さよ行ゝそ山支ふひきゝゝたべこいゝゝつたのくまび
清玄は病後の足の力なく尾居ふ噴と倒ゝゝ姫は此ひすふ外のかゝ走り
出ゝとゝゝふ清玄ゝふれなぶゝゝとゝゝふ我日来恋慕つゝ念
ゝゝゝ今日唯今いつでゝむ色くゝとべきたゝひ戒行ふ破ゝ阿鼻地獄
ふ墮ゝるゝも姫ゆゝふなゝべいとゝ師の房の恐ふうけ世間ふ面ふひのがれ
身とゝるゝも皆是姫をゝひゝゆゝふゝゝさは人の名なゝとかゝゝど
身ふ報ゝゆゝゝゝゝたべゝゝゝたゝゝゝゝゝゝゝ起上ゝゝゝゝゝふ姫は
ゝゝゝゝ腕ふも身ふのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ倒ゝゝ合破ゝ
乃ふゝゝゝゝ解ゝゝゝゝゝ姫の帯ふ身ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

それ知るべしかくまでも執著をなす我なれども過去生々の因果ぞや今ハ活るも死るも苦しかるべきいざ我執念をとゝまさせよといひつゝ

つゝくめぐりけるに姫いとゝふ迷ひ乱れ黒髪ふかのひらゝ小ゐらのごとくのごれがさゝるゝ乱れふけりこの折しも狐あるふかうれしらふや雉子の雌ひろ

菴室のうちふ乱入るを清玄おひらゝ日来修しらる戒行をやぶるまじ

これ乱よとゝくゐの生血をとゝをけるにハロのまわり朱ふとゝ顔色変り

眉をゝ目をつりあげとゝとゝふゝまゝくる光景実の毛そばだつ

ゝりあるおそをとゝく又ふげつづる姫の振袖をひたとめふられとゝくふかを

べきゝ汝いかく我仏ふまるゝいとゝ仏ものゝ殺しゝ死出三途仏

伴んとゝふ冥途のみちるべ手をたづゝゝ剣の山炎のうちふひさゝて

ゆん覚悟せよといひつゝ黒髪をつゝゝ引倒せば姫い苦しさ声とゝ

仏めゝふ人のべたをけてゝとゝひてゝとさけべども神をとまりくふゝれ

夜の空吹風ふるたける雁の声のみゝ誰答る人りゐゝやとぐ危くゝえ

ふゝりゝふ又弥陀二郎へこのゝろ富國ふゝり栗生野の光明寺ふ寄宿

しけるゝ主君義治信田平太夫ふ打ゝ家亡しゝ少ゝ大ふ悲ゝ行くゝぞ

平を夫を打家を再興ゝべゝとゝひ五三昧をめぐる修行者とゝてゝ

ふかくゝ時のいゝれなまつ同志の義士ゝ仏ゝゝひゝれゝ山夜仏

三昧ふゝゝ此菴のうちふ女のさゝりゝる声をゝれをめゆゝ垣の外ふゝゝ

くゝゝ仏窺ゝれゝ採ひめと呼声仏ゆゝ面仏ゝ知ゝとゝゝゝ主君の

姫君ゝる夏を知ゝ大ふ驚くゝゝふ走ゝ入清玄をひゝのけて姫ゝゝ

声めゝゝふいゝゝ汝法師の身ゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ仏

体を学ぶ者るべ仏修ふ免ゝおくゝゝゝ姫を伴いでんとゝれを

弥陀二郎誤て
清玄と殺し
姫を抱て逃
ゆうんとして
清玄の亡霊
後髪を
ひつぱり
のどを

曙卷之四

清玄おとへ〳〵いな〳〵姫をびえとそくをまど三世の諸佛ふ〳〵まれく
天魔の足の足我なれが今ハ行をうい〳〵べたたとひ山月の生皮ゑ剥れ
眼子ふ切まる〳〵ともゆく〳〵まぐ〳〵そひとそ〳〵〳〵れ一念変ぎべさうへいらく〳〵と
捺落ゑ沈む身なり姫をもとめふ連ゆうんといひ〳〵めれふれて乞うり
ゆ〳〵ぶ弥陀二郎せんとべく〳〵杖ふ〳〵ちとし戒刀ゑ抜く鉦打ゑ打ゆ〳〵
手さ〳〵まろり〳〵肩尖ふく〳〵斬こ〳〵けまば一色阿と叫て倒ゑ弥陀二郎
これゑ〳〵〳〵〳〵誤ーっふハぬ殺生不便さよさもあま姫の侍月ゆ〳〵
がと口裏ふ念仏ゆしまぐ〳〵姫の手をとり馳出けゑ清玄朱ふ〳〵
まぐ〳〵と起上り〳〵ひふふまりめる怖ーや腹〳〵や目前修羅の
苦をゑゑ誰ゆゑど姫ゆゑふ生まる〳〵地獄ふ墮ちる山恨ミ生〳〵り死
〳〵り〳〵ひ〳〵〳〵ぐ〳〵ぐ〳〵べ〳〵ひつ姫ゑめ〳〵〳〵かけよんば二郎

今ハ止こゑ得を乞ゆ〳〵〳〵斬つ〳〵〳〵れ例を其ハ〳〵姫と〳〵
ゆ〳〵〳〵〳〵又立上り〳〵かけふ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵眼の光ゆ〳〵〳〵〳〵
ぐ〳〵もおろ〳〵〳〵初く法師ゆも似ず執念のふゑ奴めゑ〳〵〳〵又斬つ
ぶび合破とゑ〳〵れ姫ハ袖も裾も〳〵〳〵ひ〳〵〳〵れ夢路をたぐれ〳〵〳〵ーく歩
ゆ〳〵〳〵所ふ一天俄ふゆ〳〵さ曇大雨車軸をなが暴風林〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
をさまれ光景ゑ〳〵風雨益烈〳〵〳〵〳〵髪も裾も〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵